



Title	龍梅と玉栄の姉妹が読まれたもの : 『草原英雄小姐妹』連環画の諸相
Author(s)	武田, 雅哉
Citation	連環画研究, 1, 68-82
Issue Date	2012-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98380
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98380
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_1_68-82.pdf



『連環画研究』第1号 2012年3月

ロンメイ ユーロン

龍梅と玉栄の姉妹が読まれたもの

——『草原英雄小姐妹』連環画の諸相

武田 雅哉

★1964年2月9日の「事件」

その日、内蒙古自治区某地域にて暴風雪が発生、気温は零下38度にまで低下。某生産大隊の呉添喜（蘇格爾）と呼達西拉の娘、龍梅（11歳）と玉栄（9歳）の二人は、その日、父親から羊の遊牧を任される。二人は公共の財産である384頭の羊を守り、50キロの草原を飲まず食わずで歩きつづけ、一夜を嵐と戦った。翌朝、鉄道員の王福臣によって発見され、救助される。二人は「毛主席のよい子供」「革命の後継者」として、全国に宣伝された……。



玉栄（左） と 龍梅（右）

以上が、いわゆる「草原英雄小姐（あるいは姉）妹」として伝えられる物語である。建国17年の末期において発生した子供向けの美談として、現在にいたるまで、さまざまなメディアによって伝えられている。特に、事件発生直後に制作された同名のアニメーションによって、この物語は内外に広く伝えられた。その毛沢東崇拜や、共有財産のための自己犠牲など、異なる倫理観、社会通念を持つ社会においては受け入れ難いテーマを含んでいるにもかかわらず、この物語自体のもつ「がんばる女の子」というモチーフは、多かれ少なかれ、感動をもって迎えられたようである。

事件は最初、趙琦によるルポルタージュ「暴風雪中一昼夜——記英勇保護公社羊群的蒙古族小英雄龍梅和玉榮」として、『人民日報』（1964年3月12日）に掲載された。さらに、1964年5月19日の『人民日報』に、瑪拉沁夫による「最鮮艷的花朵——記草原英雄小姊妹龍梅和玉榮」と題する「報告文学」が掲載されることによって、さらに広く知られることとなった。

その後、京劇のような舞台芸術や、連環画のような出版物にも改編されたが、決定的なのは、先述のように、事件のおきた年のうちに制作され、内外で広く視聴されたアニメーションであっただろう。

記憶が曖昧だが、筆者は1960年代の小学生の頃、学校の体育館で見せられた記憶がある。はたしてそのようなことが可能であったかどうか、裏は取れていないのであやしいのだが、少なくともぼくの「記憶」ではそうになっている。

姉妹の形象は絵画の題材として好まれたが、物語は多くの連環画、絵本などにも改編され、各時代の要求や作者の思いによって、それぞれ異なる特徴を持つに到っている。これは、いずれの文芸作品にもうかがわれる現象であろう。

『草原英雄小姐妹』の物語に特徴的なのは、そして運命的であったのは、それが1964年という時期に発生し、その数年後には文化大革命が発動され、さらにそのなかで、さまざまな改編がなされてしまったということである。

本稿では、そのあたりに注目しながら、連環画を中心とするこの物語の展開を追ってみたい。

★アニメ『草原英雄小姐妹』

まず、アニメーションの『草原英雄小姐妹』について、簡単に説明しておこう。なぜならば、この物語を描いた連環画は、このアニメそのものの改編であることが多く、物語の受容に多大な影響を与えているからである。連環画のキャラクターデザインも、当然ながらアニメのそれを踏襲しているものが多い。そしてまた、アニメとは別系統の連環画もまた、存在する。それらは、アニメの系統とは、かなり様相が異なっているのだ。

このアニメーション作品は、1964年の製作、翌年出品の「动画片」『草原英雄小姐妹』



アニメ『草原英雄小姐妹』（1964）

妹』である。先述のように上海美術電影製片廠の 40 分の作品で、脚本の担当は、何玉門と胡同倫である。

姉妹の一家が、共産党と毛沢東をこよなく敬愛していることは、冒頭で映される家のなかの様子でわかるようになっている。家の内壁には、毛沢東が子供たちとともに並んでいるポスターや、少年先鋒隊のポスターが貼られている。いずれも実在するものである。アニメーション内では「千万朵紅花一齊開放」「草原讚歌」「一顆革命紅心忠于毛主席」「革命的紅灯心中照亮」などの挿入歌が歌われる。

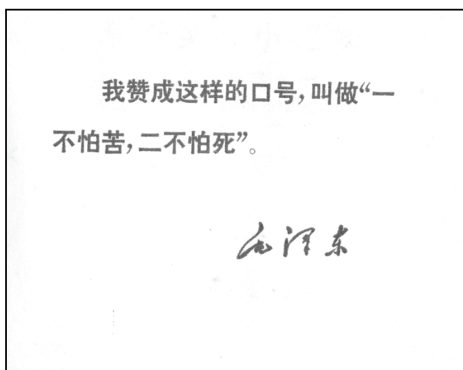
また、姉妹は雷鋒をこよなく敬愛し、彼女たちの行動は、雷鋒精神によって支えられている。二人で雷鋒の本を読むくだりもあり、アニメの画面では、表紙に「雷鋒」の二文字が認められるが、脚本では書名は『雷鋒的故事』とされている。セリフや挿入歌のなかでも、「雷鋒」の名は頻出する。

ラストでは、人民公社が春を迎えた場面が描かれ、姉妹は二人とも退院しており、友達たちと元気に草原を駆け回るシーンが描かれている。実際には龍梅は凍傷で左足の親指を失い、玉栄は右足の膝関節以下と左足の踝の関節以下を失ったのだが、このことは書き改められているようである。

★アニメから派生した連環画

まずはこのアニメの影響下に作られた連環画を見ておこう。

(A)『草原英雄小姐妹』（《草原英雄小姐妹》編絵組編絵。1970 年 11 月、上海人民出版社、64 開）は、キャラクターデザインは完全にアニメに従っている。文革がまだ激しい時期のもので、毛沢東崇拝が濃厚である。巻頭には「我贊成這樣的口號、叫做“一不怕苦、二不怕死”という毛沢東のお言葉が配され（右図）、なかで言及される書物や主席の言葉、壁に書かれたスローガンなど、文革初期の政策をそのまま反映している。

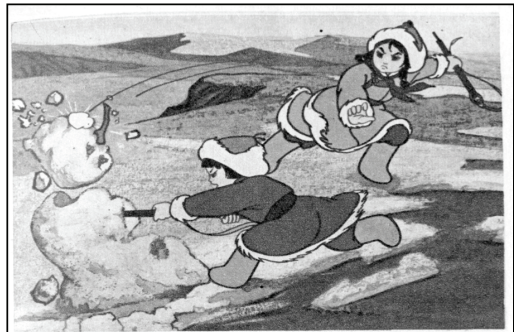


その意味では、アニメをベースとしながらも、文革期のものとして大幅に改編されており、「似て非なるもの」ということができる。

連環画のなかで言及、あるいは描き込まれている書籍は『老三篇』（『為人民服務』『紀念白求恩』『愚公移山』）と『雷鋒叔叔的故事』であり、前者はアニメには見えない。さらに、やはりアニメにはない「憶苦思甜大会」の描写、「帝（アメリカ帝国主義）、

修（ソ連修正主義）、反（反動派）」になぞらえた雪だるまを叩き潰すという過激なシーンなども、アニメにはなかったものである（右図）。

そのほか、「向雷锋同志学习」「我們的責任、是向人民負責」「打倒美帝！打倒蘇修！打倒各国反動派！」「人民公社好」「自力更生、奮發図強」などの毛沢東のお言葉、文革期テイスト濃厚なスローガンなどが、新たに描き込まれている。これらのほとんどはアニメには見えないものであり、1970 年という文革前期末の風潮をよく反映しているといえるだろう。この本については、同書の外国語版との比較を通じて、のちほどさらに詳しく見てみたい。



（23）后来，她们做起堆雪人的游戏，把大雪人当做帝、修、反，高呼着：“打倒美帝！打倒苏修！打倒各国反动派！”对准大雪人又是“刺杀”，又是“投弹”。

（B）文革期の児童雑誌『紅小兵』1970 年第 20 期（1970 年 10 月）には、「紅衛兵電影製片廠供稿」として、アニメ版を踏襲しつつ、文革風味を加えた連環画「草原英雄小姐妹」が掲載されている（右図）。

これはわずか 18 コマのダイジェスト版である。アニメでは『雷锋』の本を読んでいた二人だが、ここでは雷锋への言及はまったくなく、後光が射している赤い表紙の『毛沢東選集』を、高々と掲げている（右図）。また姉妹は同誌の表紙も飾っているが、そこでは二人は『老三篇』を読んでいる（右上図）。当時は子供たちにも『老三篇』の熟読が奨励されていた。



(C) さて、なかなかおもしろい資料が、『草原の幼い姉妹』と題するものである。1970 年の (A) 『草原英雄小姐妹』をベースにし、外文出版社から 1974 年に刊行された日本語版で、サイズも大きくしたカラー絵本である（大きさは 16 開、260mm×180mm）。

絵の構成は、基本的に 1970 年版を踏襲してはいるが、すべて新たに描き直されたもので、細部を見ると差異が見いだされる。文字も逐語訳ではなく、外国人には理解しにくいと思われる事項などは、省略されているようだ。筆者はべつに英語版『Little Sisters of the Grassland』（外文出版社、1973）も架蔵しているが、絵については日本語版と同様である。

ここでは 1970 年版（以下「原本」とする）と、これら外国語版（日本語版）の絵に見いだされる差異（表 1 としてまとめた）とその意味について、見ていこう。

▶表紙と 1 頁に掲げられた、姉妹 2 人の正面を向いた立ち姿であるが、原本（左上）では 2 人とも『毛主席語録』を右手に抱えていたものが、外語版（左下）では龍梅が遊牧用のステッキを握っているだけで、玉榮はなにもし持っていない。また、



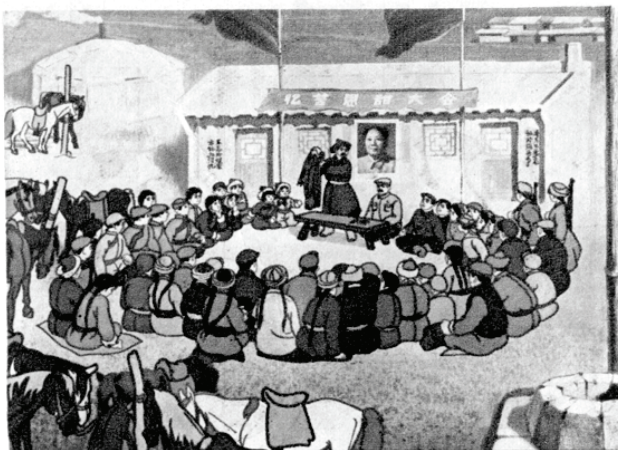
いずれも毛沢東バッジを胸につけているのだが、外語版は立体感がない。むしろこれは、原本が毛沢東バッジをリアルに描こうとしたことによる差異であろう

▶原本において、4 頁から 5 頁にかけて書かれている「憶苦思甜大会」のくだりが、外語版ではすべて削除されている。

4 頁では、毛沢東の肖像が写真貼付の手法によって掲げられ（右上図）、5 頁では「不忘階級苦、牢記血泪仇」のスローガンが壁に書き込まれている（右下図）。文章には「帝国主義、修正主義、反動派を徹底的に消滅しよう」などの文言も見え、文革前期の激しさを反映している。これら文革期に特殊な行事は、外国のよい子たちには、ちょっと難しく、素直に楽しめないものと判断されたものであろうか。

しかしながら、原本 23 頁の「帝、修、反」になぞらえた雪だるまを、叩き潰すシーンは、外語版でも、20 頁にそのまま描かれている。

▶原本 11 頁には、バツーおじさんが、姉妹と一緒に『老三篇』を暗唱したというくだりが見える。同頁では、バツーおじさんは、雷鋒に学ぶことも奨励している。この頁も、外語版では完全に削除されている。



（４）在“忆苦思甜大会”上，牧民们愤怒地控诉旧社会。被压迫人民都有一本血泪账，龙梅和玉荣听得很激动，阶级的仇和恨，牢记在心头。



（５）支部书记巴图激动地讲：“我们翻身不忘共产党。我们要紧跟毛主席，永远干革命，彻底消灭帝、修、反，立志解放全人类。”

▶原本 22 頁では、姉妹が岩に腰をおろして、『雷鋒叔叔的故事』を仲良く読むというシーンが描かれている。絵の中では、雷鋒の顔と「雷鋒」の 2 文字を配した表紙の本が描きこまれている（下左図）。外語版では、「雷鋒」の文字も雷鋒の顔も削除されている（下右図）。



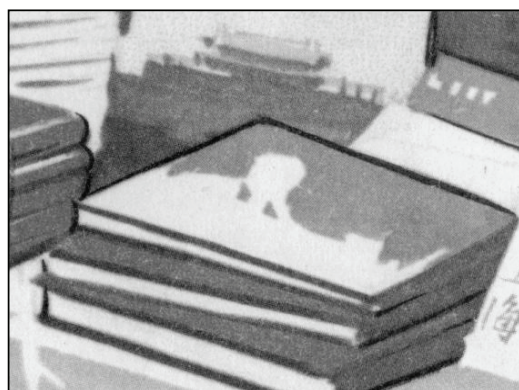
▶原本 38 頁（下左図）のバトゥおじさんの事務室の中だが、写真版の「毛主席万歳」というポスターが、外語版（下右図）では削除されている。ポスターの両側に貼られている 2 つのスローガン「指導我們的思想的理論基礎是馬克思列寧主義。」「領導我們事業的核心力量是中國共產黨。」はそのままであるが、いずれも「毛沢東」の文字が削除されている。また、事務机の上に並べられている本は、おそらく『毛沢東選集』であろうと思われるが、原本では、それらしい書名が不鮮明ながら書きこまれているのに対し、外語版ではなにも書きこまれていない。



▶原本 55 頁から 59 頁は外語版ではすべて削除されている。ここは姉妹が雷鋒や毛沢東の言葉をかみしめる場面で、「我們的同志在困難的時候、要看到成績、要看到光明、要提高我們的勇氣。」「下定決心、不怕犧牲、排除萬難、去爭取勝利。」「向雷鋒同志學習」などの毛沢東のお言葉がゴシック体で列挙されている。

▶原本 94 頁と 95 頁の病院でのやり取りは、外語版にはない。

▶原本 97 頁（右図）は、病院で療養する二人が全国から届いた慰問品を前にする場面だが、原本では連環画『雷鋒的少年時代』が見え、表紙には、そのタイトルと「雷鋒少年」の顔が鮮明に描きこまれている（下左図）。外語版では、雷鋒と文字は、白い輪郭を残して消えている（下右図）。



▶原本 98 頁では、看護婦が贈られてきた毛沢東像（写真貼付）を掲げ、姉妹はこれに敬礼をする（右図）。毛沢東像の下には「読毛主席的書、聽毛主席的話、照毛主席的指示辦事、做毛主席的好戰士」との、林彪が『毛主席語録』第 2 版（1965 年 8 月刊）に書いた題詞が見える。看護婦の後ろの医師は、『毛主席語録』を手になっている。外語版では、この頁は削除されている。



（98）同时，还给孩子寄来了最珍贵的礼品，毛主席的著作和毛主席画像。鼓励小姐妹在革命的征途上，紧跟毛主席继续奋勇前进。

国内版と外語版の差異をまとめてみよう。

国内版では、文革時期の毛沢東崇拜に関わる具体的なメッセージが、執拗に提示されている。これは当時の文芸作品全般に共通する特徴であるが、実際の龍梅と玉栄の事件の時点では、ありえないものでもあった。あくまでも文革時の時勢に、キャラクターとしての「龍梅と玉栄」がつきあってくれた、ということだ。

それに対し、外語版では、それらの要素は完全に削除されたり、あるいはメッセージ等の書き込み/描き込みが、控えめになっているようである。おそらく外国の読者には、理解しにくい、あるいはそれほどの宣伝教育を外国のよい子たちに対しておこなう必要を認めなかった、などの理由が考えられるが、なにぶん当事者ではないので、推測に域を出ない。

連環画や少年児童向けの物語のあるものは、外文出版社によって外国語版が刊行され、対外的な中華人民共和国キャンペーンとして機能していたが、その際になされた改編の方法もまた、検証にあたいるであろう。また、このような改編が、普遍的な方針であったのか、あるいはまた、この作品に特有のものであったのかについても、さらに多くの事例を検証しなければ、なんとも言えないのである。

	『草原英雄小姐妹』(1970)	頁	『草原の幼い姉妹』(1974)	頁
1	『毛主席語録』 毛沢東バッジ	封、1	『毛主席語録』を持たない。 バッジに顔がない	封、1
2	憶苦思甜大会のくだり	4～5	頁ごと削除	
3	叔父さんの『老三篇』の話	11	頁ごと削除	
4	『雷鋒叔叔的故事』の表紙	22	表紙の雷鋒とタイトル削除	19
5	「毛主席」像 『毛沢東選集』の文字	38	いずれも無し	35
6	毛沢東と雷鋒の教えを確認	55～58	頁ごと削除	
7	病院でのやりとり	94～95	頁ごと削除	
8	『雷鋒の少年時代』の表紙	97	表紙の雷鋒とタイトル削除	88
9	「毛沢東図像」の贈り物	98	頁ごと削除	

表 1 連環画原本と外語版との差異

★非アニメ系統の連環画

次に、アニメとは別系統の連環画を確認しておきたい。

(D)『英雄小姐妹』(1965年5月、中国少年儿童出版社、24開)はカラー絵本である(右図)。文は劉振声、絵は王玉泉による。拼音が付してある。絵は2人に似せて描かれているが、少し太めか。「努力做毛主席的好学生」「做一个堅強的紅色接班人！」など毛沢東への崇敬のことばがみられるが、「雷鋒」の2文字は見あたらない。物語は瑪拉泌夫「最鮮艷的花朵」に従っている。



(E)『草原小姐妹』(1965年5月、天津美術出版社、60開)は、官布による編絵、杜滋齡による封面設計。これもまた実在の姉妹に似せた絵柄である。最後のコマ(58頁 右図)では、毛沢東の肖像の前に立つ二人が描かれているが、毛沢東崇拜の文言も見えているが、雷鋒は不在である。ストーリーは瑪拉泌夫の「最鮮艷的花朵」に従ったもの。



(F) ほぼ同時期に描かれた2人の肖像に、『小朋友』(1965年第3期〔総第244期〕、1965年2月10日出版)の表紙を飾ったものがある(右図)。これも2人に似せて描かれたものだ。「英雄小姐妹——龍梅和玉荣 朱延齡画」との説明がある。



(G)『草原鮮花』(1966年1月、江蘇人民出版社、60開)は、汪澄による改編、王賢統による絵画(右上図)。瑪拉沁夫の「最鮮艷的花朵」に依拠していることが明記されている。

23頁には、死んでしまった羊を背負って歩く龍梅が描かれている。この場面は、他の連環画には描かれていないものである。

そのキャプションに、「まだ11歳の龍梅は、背負っている死んだメス羊を、千斤よりも重いものに感じました。想えばこの羊は、彼女が自分の手で育てたものでした。背負っているのは羊ではなく、自分の妹であるかのように思いました。」とある。その絵とともに、なんともせつないのである(右中図)。

この連環画の特徴は、事件後の、病院での彼女たちの生活について、少しばかり詳しく描かれていることだろう。また、68頁では、内蒙古自治区人民委員会主席ウランフの題詞を掲げている(右下図)。

この連環画が出た1966年、文化大革命が発動されるや、ウランフは失脚し、1973年に復職するまで、あらゆる職務を剥奪された。この連環画には、毛沢東も雷鋒も出てこないのがおもしろい。



(23) 才十一岁的龙梅,背上那只死母羊,真比背上千斤东西还重。她想起这只羊,是自己把它牧养大的。她仿佛背的不是羊,而是自己的妹妹。



(68) 内蒙古自治区党政领导同志,好几次到医院去探望。乌兰夫同志还为两位小英雄题了词,号召各族青少年学习两位小英雄的模范行为和高尚品质,做革命的接班人。中国共产主义青年团中央委员会也写信表扬两位小英雄。

★増殖した物語群

文革後期にいたって、龍梅と玉栄の物語は、まったく別の物語として再生産されるという現象を見た。そうしたもののひとつが、革命現代舞劇『草原児女』(1974年 北京電影製片廠、1975年)であり、いまひとつが、人形劇『草原紅花』(集体創作演出、北京市木偶劇団 人民美術出版社、1975年1月)である。

革命現代舞劇『草原児女』については、北京電影製片廠で1975年に作られた映像があり、DVDになっているので、見ることができる。ストーリーは、内モンゴルの少年先鋒隊隊員の特木耳(兄)と斯琴(妹)の二人が暴風雪の中で羊たちを守り、さらに反革命分子どもとも勇敢に戦う、というもの(右上図)。

人形劇『草原紅花』は、同名の写真版の連環画(集体創作演出、北京市木偶劇団 人民美術出版社、1975年1月)によれば、内モンゴルの少年先鋒隊隊員で、毛主席と雷鋒をこよなく信奉する斯琴(姉)と巴特爾(弟)が、暴風雪の中、羊たちを守りながら、破壊活動を企てようとする階級敵の古勒格と戦うというものである(右下図)。

いずれも龍梅と玉栄のストーリーの骨格を利用して、反革命分子や階級的という「敵」を登場させ、二人に「天」だけではなく「人」との戦いをも強要したところに特徴がある。

その程度のものであるから、特木耳(兄)と斯琴(妹)にせよ、斯琴(姉)と巴特爾(弟)にせよ、ぜんぜんかわいくないのである。



81 啊!果然是个凶恶的敌人!巴特爾首先揭露说:“你为什么轰散羊群?你为什么把‘小花耳朵’扔进雪坑?”斯琴也质问:“你为什么打针让母羊早产,破坏改良种羊?”这家伙一看阴谋被识破,立刻拔刀逼向斯琴。

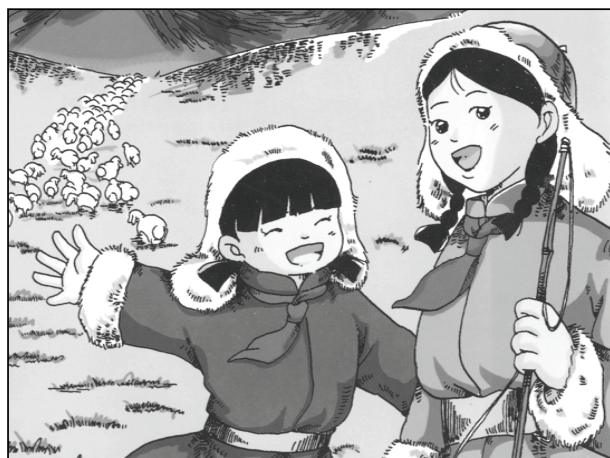
★新時期における『草原英雄小姐妹』

文革後、現在にいたるまで、姉妹の物語は数多くの絵本として再生されている。ここでは二作品のみ挙げておこう。

ひとつは「愛国主義教育故事画庫・紅孩子系列」の一冊として 1997 年に刊行された『草原英雄小姐妹』（郁薇/編文。唐淑芳、馮有康、陳小京/絵画。浙江少年児童出版社）であるが、従来のものとは全く異なった、ゆるいタッチで描かれている（下図）。この当時の挿絵やアニメでよく使われるデザインと似ているようだ。



いまひとつは、「老故事新漫画」の一冊として 2002 年に刊行された『草原英雄小姐妹』（「読図時代」特別企画。大像出版社）。こちらまた旧来のものとは一線を画している。日本の漫画やアニメの影響を受けているようでもある。いずれにしても、このようなものでなければ、もはや中国の子供たちの嗜好には合わないということなのだろう（右図）。



プロパガンダという目的のために綴られたある物語は、プロパガンダそのものの目的が左右に揺れ動くにつれて、なにがしかの改編を加えられていく。次から次へとめまぐるしく書き替えられるシナリオを渡された主人公たちは、これにすみやかに対応をすることを迫られる。『草原英雄小姐妹』の姉妹もまた、子供ながらに、そういったオトナの事情につきあわされ、読めもしない本を手渡され、けなげにもその役を演じたのであった。

そういえば、敦煌文書の中にある『舜子変』では、よいこの舜ちゃんが、次々と迫りくる危機を脱したあと、書斎にもどると、まず『論語』と『孝経』をお勉強し、それから『毛詩』と『礼記』をお勉強することになっているが、アナクロニズムの読書を強えられるよいこたちというものは、いつの時代もいたものであり、それはそれは、ごくろうさんなことなのである。

参考文献

- 瑪拉沁夫「最鮮艷的花朵——記草原英雄小姊妹龍梅和玉榮」（『中国新文学大系 1949-1976 第13集 報告文学卷2』徐遲主編。上海文藝出版社、1997。所収）
華夏「内蒙美術在躍進」（『美術』1964年第6期）
何玉門・胡同倫「草原英雄小姐妹」（『紅色小号手 美術電影文学劇本集』上海人民出版社、1973。所収）
中央新聞紀錄電影製片廠影視資料部編著『新聞簡報中国 生活 1951-1986』（上海科学技術文献出版社、2009）

付記

龍梅を発見し、積極的に救おうとしたのが、実は王福臣ではなく、哈斯朝禄（当時、右派・管制分子。1985年に名誉回復）とその息子の那仁滿都拉（当時9歳）であったことなど、近年判明した事件の隠された真相については、以下を参照。

李新宇「草原英雄小姐妹」背後的故事」

（『文藝争鳴』2007年第2期、『北京文学・中篇小説月報』2009年第5期掲載
いま <http://qkzz.net/magazine/0257-0262B/2009/05/3630322.htm> による）
『往事』（テレビ番組）「草原英雄小姐妹背后的英雄（上）（下）」

<http://real.joy.cn/video/900791.htm>

<http://real.joy.cn/video/902698.htm>

The Memory of Longmei and Yurong

